



日本記者クラブ「大山名人を囲む会」

勝負と人生

大山康晴 将棋十五世名人

1990年7月4日

現 役のほうが収入もいいし、また仕事を持っている楽しさもあります。引退しますと、どうしてもボケも出るんじゃないだろうか。だから、やっぱり現役でいたい、というのが、正直な気持ちでもあります。(p1)

私 なんかは、自分で言っちゃ悪いんですけども、本当に強い人は若い頃ばかりじゃなくて、それを長年続けられる人じゃなかろうかと思うんです。私はそう思うんですが、私が言うと「あいつは威張っているんじゃないか」ととられます。(p3)

ひ とつの道を長年続けていれば、いずれその仕事に対する自信がつく時期は誰しもあるし、また、それを貫いていくこともできます。けれども、スランプになるのは、主として天狗になる気持ちの時ですよね。(p4)

若 くて伸びる人は楽に仕事をしちやいけな、と思いますね。同じ仕事をするんでも、2時間でするものを5時間かけなきゃいけないし、5時間のものは7時間かけて慎重にその仕事をしていくことによって、思い出も残るし向上していくものです。(p7)

弱 い人のスランプはおかしいと思うんです。弱い人はあくまで弱いんでして、スランプじゃないんですよ。ある程度強い人が不調になるのが、スランプじゃなかろうかと思えます。(p7)

将 棋の駒はやはり飛車が中心ですよね。あとは角。それから大事な駒の動きになりますと、2枚の銀がありますね。あれが一番基本なんですよ。(p8)

将棋の大山康晴です。皆さま方には、日頃、将棋連盟としても私個人としてもお世話になっております。

私は67歳になりますが、いままでに優勝回数が124回、勝ち星にいたしますと、1401勝。そのほかいろいろな記録がありますが、自分としてはともかく元気であったことが今日まで現役を続けてこられた理由じゃないか、と思っています。いろいろなことがありましたが、やはり一番厳しかったのはAクラスにとどまるということじゃないか、と思います。

将棋界のAクラスというのは、名人のほかに10人おります。クラスによって、私たちのサラリーが決められているわけなんです。10人が1年間リーグ戦をして、成績の悪い2人がAクラスからBクラスに落ちます。1階級落ちますと、基本給が3割ダウンする。Bクラスでも同様に成績の悪い2人は、さらに下のクラスに落ちてまた減額される。こんなふうには私たちの月給は、各新聞社から頂いた契約の中から、段位によって配分されるのじゃなくて、クラス制で配分いたしております。

私は昭和23年にAクラスに上がりましたので、いまから思うと42年経っております。42年間一度も落ちなかったというのが、一つの安定した成績と実績じゃないかと思っています。Aクラスから落ちたら、やはり引退しなきゃいけない、とも思っていますが、逆に、Aクラスに残っている間は、何歳までか分からないが、現役でやりたい。そのほうが収入もいいし、また仕事を持っている楽しさもあります。引退しますと、どうしてもボケも出るんじゃないだろうか。だから、やっぱり現役でいたい、というのが、正直な気持ちでもあります。

イヤだった3月5日の順位戦

長い間いろいろ対局をしてきました。どの将棋が一番思い出に残っているかといわれると、もちろん名人になった時の1戦もあるでしょうし、また2度名人になって落ちた、そういう厳しい経験もありますが、ことしの3月5日、この日は私は一番イヤだなイヤだな、と思って

日一日を過ごしたように思います。

3月5日は、順位戦の最終局でした。10人がリーグ戦をするんですから、9局戦うわけです。3月の始めに3勝5敗だったんですね。3勝5敗で、3月5日の将棋に負けると3勝6敗になる。ほかの人の成績からみて3勝6敗ならまず陥落する。そうすると、その日が現役の最後の日になるんじゃないか。そんなことを思いますと、もう本当にイヤな毎日でした。日が経つのをとめてくれりゃあいいのにと。だけど一日一日経ってまいります。何とか勝ちたい、どうしたらいいだろうか。いろいろ悩み、悩んでみても、どうやっていいのかわからなかったんです。

10日ぐらい前になった頃に、こんなイヤな一日一日を過ごすんじゃとてもつらいから、落ちることを心配するよりも、むしろ自分は下の地位なんだ、この勝負に勝ったら上に上がれるんだ、と思うことにしたのです。そういう気持ちになれば、そんなにつらい一日にはならないだろうと思ったことが、良かったんじゃないか、と思います。もう一つは、どうせ3月5日が最後の将棋になるんなら、思い切って指してみよう、という気にもなりました。よく新聞、テレビで“受けの大山”とか“忍の大山”と報道されて、攻めようか守ろうか、あるいは積極か慎重かという時には、立場上“慎重な”決断が比較的多いのが大山将棋でした。が、3月5日を前にした時には、もうどうせ最後の一番なら思い切って指してみようと、まあ、そんな気持ちになった時に、心の負担が軽くなったんじゃないかと思うんです。

ちょうど桐山さん(桐山清澄九段)が対戦相手でした。相手方も3勝5敗。15年間ずっとAクラスの桐山さんも、負けると多分落ちそうな成績で、相手方にもプレッシャーがかかっている。お互いさまだから、今度の将棋は気持ちの持ち方が勝負じゃなからうか、そんなことを思いながら、対戦場に行ったわけなんです。

将棋会館の入り口には、NHKをはじめとしたテレビ関係の方も取材に来ておられました。「きょうはAクラス最後の将棋だから、皆さま

方の写真を撮りに来ましたよ」とカメラマンも言っていました。だけど、ほかの人は全く関係ないんですよ。大山がAクラスを落ちた時は、テレビも、あるいは新聞なら翌日朝刊に出さなきゃいけない。こちらもそれは分かっています。ですから、半ば「イヤだな」と思うのと、「まあ、仕方ないな」という両方の気持ちで、玄関を通過して、対局室に入りました。今度はそこに雑誌社のカメラマンがいました。そんなことで桐山さんと盤をはさんで座りました。とにかく思い切って指す、と心に思いながら臨んだわけなんです。

難しい局面が再三ありましたけれども、どっちにしようかと思った時には、「もう行ってしまえ」と積極的な手を指した。相手の桐山さんは震えがきたのか、日頃の大山さんとは違うな、と思いながら、バックするような慎重な手が多かった。そして、結果的に私が勝ち、「大山会心の一局」と報道されました。が、私にしてみれば、決して会心の一局じゃなくて、半ば震えながら、「ええい、やけくそだ!」と思い切っていたことが勝ちにつながったんじゃないか、と思うんです。そんなことを思いますと、勝負の道というのは、「常々技術を中心に慎重に」ということが大事かも分かりませんが、時によると、こういったことも勝利をよんだ原因じゃなかるうかと、しみじみ感じたのが3月5日のことでした。

若い人はいつも強い

いつの日かまた、そういったような状態になることもあるし、また引退も目前に迫っておりますけれども、たとえ1年でも長くやりたい、というのが本心です。多くの方から目標として「70歳までは現役でやってほしい」とか、「1500勝になるまではやったらどうか」とよく言われます。しかし、1500勝というと、これから100勝しなければいけない。年間33勝あげて、やっと3年間で達成となるわけですし、3年経てば70歳になっているわけですから、どちらが先か分からないけれども、一番一番というのが本当のところなんです。

将棋界は、皆さん方よくご存じのように、近年は若い人たちが活躍しております。特にことは読売新聞の竜王戦で、まだ19歳の羽生(善治)さんが優勝しました。対局料・賞金を含めますと3000万円ぐらい入っているはずですよ。まあ、税金がいくらか分かりませんが、それにしてもいまは19歳の人がいいカネになるなあ、と思う。自分たちが若い頃にあれだけの賞金をもらってれば、いくらかカネが残っているんじゃないか、と思うけれども…。(笑)また、産経新聞の棋聖戦で今期も挑戦者になった屋敷(伸之)さんは、たしかまだ17歳じゃないでしょうか。前回は屋敷さんが挑戦者になって中原誠棋聖を2対1まで追い込んで、最年少のチャンピオンになるんじゃないだろうかと言われながらも、最後2番負けて棋聖を逸しました。今回も2連敗していますので、いまの見通しでは棋聖は中原さんが守るんじゃないだろうか、と思っております。

そのほかにも若い20歳前後の人たちが非常に活躍しております。私自身も17歳で4段になりました。年輩の方々のご経験があるでしょうけれども、昔は徴用もあったし、召集もあったし、戦前戦後の食糧難ということもありました。しばらく新聞紙上においても「将棋は休み」という時もありました。私は大体20歳ぐらいの時が一番強い時期じゃなかったか、と思いません。

諸先輩になりますと、亡くなりました木村義雄14世名人が8段の推薦を受けたのが、たしか数え年の20歳だったと思います。木村名人は自分を「若造」と言って、「若造が20歳で8段になるのは失礼だから1年辞退します」と、資格がありながらも1年辞退して、21歳の時に8段になった。満に直すと20歳になるわけですが。

そんなことを思えば、いつの時代も若い人が出てくるのは当然だし、それがなきゃ、その社会が発展しない、と思います。しかし、いまの若い人は、私たちの時代と違って、研究の仕方が少し違うんじゃないか、とも思います。近年は共同研究的な要素が非常に強いですね。何人

かのグループで一つの将棋を検討して、そして「ああでもない。こうでもない」というようなことをやる。また島朗前竜王なんかはコンピューターを入れて、いろいろなデータを自分自身でインプットして、対局に臨む時にはそれを参考にして作戦を立てるようです。相手の最近の指し方なり、特徴なりをコンピューターに出して、それを検討して対局場に行くようです。機械を対局室に持って行って将棋をするようになれば、データをたくさん入れているほうが勝率がいいんじゃないか、と思う。私たちは、記憶が中心ですけれども、勉強の仕方がずいぶんと変わってまいりましたね。その辺の成果が非常に出てきているように思います。

先輩の方がやりにくいんですよ

問題は、優秀な若い人たちがいつまで持続できるか、ということですね。私なんかは、自分で言っちゃ悪いんですけども、本当に強い人は若い頃ばかりじゃなくて、それを長年続けられる人じゃなからうかと思うんです。私はそう思うのだが、私が言うと「あいつは威張っているんじゃないか」ととられます。

若い人、また下の地位の人との対局では、先輩の方がやりにくいんです。例えば私が羽生さんとやりますと、ちょうど孫に近い年齢ですよ。孫のような人とやって力が出るもんじゃないですよ。(笑)この子は可愛いな、という気持ちになる。(笑)

中原名人ですと、24歳違う。私の長男とほとんど変わらない年齢ですから、息子のような感じですよ。中原さんは一番数多く指して負け越している相手ですけども、あの人は決して勝って威張る人じゃない。勝った時に「中原名人、どこで勝ちを確信いたしましたか？」と記者がきけば、「ずっと最後になって王が詰む間際になって、いやア、あの辺でやっと勝ちを確信した。しかし、終始大山名人に押され気味で苦しい状態が続きました」と、私を負かしておきながら上手に褒めるんですね。負けたほうがいい気持ちになりますよ。

大体、そういったように相手を立てるなり、

負かした相手をいい気持ちにさせるような人柄の人が、やはり、強い人なんですね。勝った時に「いやア、先輩はたいしたことないし、もう衰えてますよ」なんてことを言ってくれば、「コン畜生」と思って頑張るんですけども。(笑)勝負の中にも人柄というものがあると思うんです。その点、若い人は本当に心得ていると思います。最近の人は勝ってもそう威張らない。中にはそうでない人もおりますけれども、一般的には威張らない。

では、どういう人が強さを持続させるのかということですが、これは私の経験から言うんですけども、やはり健康でなきゃダメだと思いますね。私たちの職業は代理がききません。「きょう、自分はちょっと体調が悪いから、お前代わりに行け」というわけにはいかない。何日か先に対局が予定されているなら、その日を目標にして健康管理をしなければいけない。

皆さん方からご覧になりますと、碁とか将棋は、実力による勝負というふうに思われるかもしれませんが、私たちから考えると、技術はプロの仲間でしたら、ほとんど変わらないものです。4段の人間も、8段も、名人も本当に変わらない。ただ、上の人はいいい時と悪い時の波が少ないんです。そのために「安定している」ということが言えるんじゃないか、と思うんです。

7割の勝率なら棋界のトップ

もう一つ、勝負の中にはツキとか落ち目というものがあるんじゃないかと思います。落ち目になりかけますと、いくら頑張っても努力してもうまくいかないものです。迷いは常にあって、迷った時に、「どうしようか・・・」がポイントなんです。落ち目の時には悪いほうへ悪いほうへ行くものです。逆についてくると、「どうしようか」と困った時でも、後から思うと、いいほうに向かっていくようなことが多いんです。私の成績をずっとデータで出してみますと、3か月ぐらいを周期にツキと落ち目が交互にきているように思います。1か月半ツキが続いたと思えば、あと1か月ぐらいした頃から落ち目になる。縁起をかつぐなり、あるいはいろいろ

な切り替えをしながら、なるべく落ち目から早く立ち直れるように、落ち目にならないようにと、そんなことを長年配慮しながら対局してきたつもりです。

人から見られて、「あの人はいま調子が悪いんだ」「落ち目なんだ」と思われたら、相当重症のスランプですよ。「いつも順調な」と思われる中で、人に気がつかれないように、うまくその波を乗り切っていく。それができていると、「いつもいいな」と言われるじゃないか、と思います。本人にとっては、常に調子がいいか悪いかということを苦慮しながら、少しでもいいほうへ、いいほうへと、まあ、こんなことを思いながら、対局してきたものです。振り返ってみて現役生活が50年ですけれども、そういう悪い状態の時のコントロールがうまくできたことも、成績が安定した原因じゃないか、と思うんです。

将棋界には、名人戦なり、竜王戦なり、各棋戦のタイトルが現在7つあります。その中で本当に棋界のトップだ、と人から言われ、実績を残すには、まず7割の勝率が必要だと思います。15年とか、20年とか、コンスタントに7割の実績があれば、トップの座につくことも可能だ、と思います。これが例えば6割9分9厘と、7割を1厘でも切るようになると、「ことしのチャンピオンはあぶないんじゃないかならうか」といったムードになりがちですし、事実、危ない状態になります。

私が将棋界に入って4段になりましたのが、昭和15年、それから30年くらい勝率は、ずっと7割を超えておりました。昭和47年に中原さんに名人戦で負かされて、それからタイトルを取ったりのがしたりはしましたけれども、昭和45年までの30年間は7割を超えていました。それから後はだんだん7割を切るようになって、現在は6割5分から6割6分、その辺じゃないかならうか、と思います。

いまの中原さんにしても、おそらく7割を切るか、すれすれじゃないか、と思うんですね。谷川前名人にしても6割8~9分で、7割を切っているんじゃないか、と思います。だから、

いまの谷川さんはまだ安定していないわけです。ですから、4年間名人を取ったが、中原さんに取り戻された。加藤一二三さんも一年間名人になりました。けれども、この人も7割をずっと切っていますので、名人の期間は短かった。勝率7割というのはなかなか大変な数字です。

羽生さんあたりは、まだ若いし、勝ち上がったばかりですから、おそらく勝率は8割を超えているか、そのくらいだと思います。私にしても、4段になった時から5段、6段の5年間ぐらいいは8割を超えていました。だから、いまの羽生さんなんかも当たり前と思うが、7割以上が何年間くらい続くか。まあ、健康ということもあるだろうし、また周囲の人の環境、友達、先輩、こういった方々との付き合いによって、いろいろな指導もされるだろうし、これがまた反省する材料にもなって、年齢を取り成長していくんじゃないか、と思っています。

一つの道を長年続けていれば、いずれその仕事に対する自信がつく時期は誰しもあるし、また、それを貫いていくこともできます。けれども、スランプになるのは、主として天狗になる気持ちの時ですよ。これが一番スランプの状態じゃないか、と思うんです。自信を持たなきゃいけないが、天狗になっちゃいけない。芸能の社会や勝負の道で若い人がスターとして活躍いたしますと、どうしても周囲の人におだてられます。子どもと思うような年ごろの人でも「センセイ」と呼ばれるだろうし、お小遣いももらえるだろうし、ごちそうもしてもらえます。すると、だれしも自分自身が偉くなったような気持ちになるんですね。いつしか自信が天狗に変わりがちなものなのです。そういう意味では前途有望な若手には、小言を言ってくれる人がそばにいることも必要じゃないだろうかと、私なりに感じているわけなんです。

ホテルへ着いたら“逃げ場”の確認

一つの道を長年続けるのは容易じゃないけれども、そのうちには調子が良かったり悪かったり、いろいろな思い出があるものです。

全国各地の旅館、ホテル、いずれも超一流のところでお局させていただきました。おかげで各地をかなり知っているつもりです。出かける時に私が一番気を遣うのは、あすの相手を意識しながら、どういう作戦を立てていこうかということ。こんなことは他人には言わない、自分で工夫するものです。しかし、年齢と共に忙しくなり、そんなことがあまりできなくなり、出たとこ勝負と言っちゃ悪いけれども、相手の様子を見ながら作戦を立てよう、といった試合運びにもなりました。

そういう中で、私が旅館やホテル、特にホテルですけれども、到着して一番先に気をつけることは、火事があった時にどこから逃げようか、ということなんです。負けて王が詰むのは仕方ないが、煙に巻かれて動けなくなっちゃ困るから、まず逃げ道が一番だと。(笑) その次は、電気設備はどうだろうか、あるいはフロントへは何番を回せば連絡がつくだろうかといったようなこと。他人よりも少しでもその場の状況を早く知っておきたいという気持ちでそうしています。

ほかの人がああじゃないか、こうじゃないかと言った時にも、いや、それはこうだ、ああだと、自分が知っていれば教えてあげられる。そうしたムードになれば、心が落ち着くんじゃないか、と思うんです。勝負に行く時は、自分の部屋に閉じこもっていて、あした将棋盤の前に座ればいいというものじゃなくて、どこに心の落ち着きを求めるかということも大事なことじゃないかと思うのです。それができれば、少しは余裕ができるだろうし、冷静な判断も下せるんじゃないだろうか。そんなつもりでよく各地に行ったものです。

私は、若い頃にはよく碁も打ちましたし、麻雀も好きでよくやりました。対局の前の晩には、将棋の場合は碁か麻雀、碁の場合ならば将棋か麻雀というのが付きものです。私も碁のほうでは6段の免状をもらっております。段位が高くても強そうだけれども、実力はさほどではない。私たちが碁の免状をもらいやすいのは、日本碁院の先生方によく将棋の免状をあげているん

で、そのお返しがあるんですね。(笑)

将棋連盟から新聞社の方たちに段位を差し上げていますが、社長クラスでしたら、5段か6段、局長クラスでしたら4段ぐらいが多いですね(笑)。部長クラスなら2, 3段、将棋の担当者なら初段、2段くらいですか。(笑)

私は棋院から囲碁6段をもらっていますが、実力はアマチュアの県代表に2目くらいですね。一般的にいうと、強い部類に入るかも分かりません。麻雀も本当によくやりましたが、対局をあすに控えて負けては、気分転換にもなんにもなりやしないですよ。やっぱり、麻雀は勝たなきゃ面白くないもんですね。(笑) どうやったら勝てるか。私もそういうことについて関心が強いほうですけれども、やはり、うまい人は非常に注意力が行き届いていますね。あの牌があそこから出て、あそこに入った。だからどうだろうか…。

麻雀のうまい人は、まあ、私の見方ですけれども、若い人ということが一つと、もう一つは目のいい人。目がいいから注意が行き届く。眼鏡をかけている人で抜群にうまいという人はあまりいるもんじゃないですよ(笑) だから、初対面の方と麻雀をやる時はなるべく年齢のいった人、眼鏡をかけた人を勧誘したほうが勝つ率が高いんじゃないだろうか。(笑)

そんなことをしながら対局の前夜を過ごして、自分の部屋に帰って寝ようと思うんだが、翌朝、記者の方にきかれると、「昨夜はよく寝ましたよ」といつも言いますが、10回に一度ぐらいは、あすの対局が気になりになって寝つきが悪い。仕方ないから起き上がって夕刊を見たり、将棋のことを考えて「どうしようかな」…。そんなことを思いながら寝ようとはしますけれども、やはり、将棋が気になりになる時には、どうも結果が良くない。

封じ手を盗みたくなる時も

何が一番気になりになるかということ、2日間のタイトル戦の場合には、“封じ手”を行なうんですね。大体夕方5時半になりますと、その人の手番の時に次ぎの一手を指してしまう

と、お互いに分かってしまうものですから、例えば七六歩とか、三四歩という手を紙に書いて、これを“封じ手”とするんです。自分自身は知っているが相手側は知らない。その変わり、その紙に書いたものを立会人に1通と、もう1通は旅館やホテルの金庫に保管してもらいますが、それを変えることはできないんですね。ですから、自分の書いた手にまずい手があった時には、「何であんなまずいことをしたんだろうか」と、そのことが悔みになるのと、何とかあれを盗み出して取り換えるわけにはいかんだろうかとも思う。(笑)しかし、実際にはできません。

また、相手が、“封じ手”の時には、あの手がこられたら困るな、という手が分かるんですね。あくる日になって、相手方にいい手を指された時、「さぁー困った」という表情をしたんでは、作戦上よくない。それで一番困った手を打たれても、もうそれは承知の上だといったように、次の手をパッと指してやろう。それにはどうしたらいいだろうか。こんなことを考えていると、つい眠りが浅くなる。ずいぶん寝つきの悪い夜もありました。

こんなように対局の前の晩にもいろいろなことがありましたし、対局している最中にも、いろいろな思い出が数々あります。昭和30年から31年の名人戦の7番勝負で、花村元司さんと対局したことがありました。お互いに早指しなんですね。花村さんも早指しで、私も早く指しております。一日目の3時頃にはもう勝負がつきそうになったんです。担当の長谷川さんという方がその場において、「名人、2日の将棋が一日で終わってしまったのでは、設営上も報道上も困るんです。何とかありませんか」と言われた。(笑)「そんなに困るんなら何とかしましょう」と言って、花村さんにもそのことを伝えて、少しブレーキをかけようじゃないか、ということにした。お互い少しテンポを落としたんです。それでも手数がどんどん、どんどん進んで行って、終局寸前までできましたが、なんとか2日間にしたということもありました。「よかった」と新聞社の方は言っていました。そ

んなふうに新聞社の担当者から「ブレーキをかけてくれ」なんて言われた思い出もあります。

また、富山で行った一戦がありました。その時は相手が升田幸三さんでした。世間では2人をライバル視して、ほんとに喧嘩相手のような印象を持っていらっしゃる方が多かろうと思いますけれど、実は私にとって升田さんは兄弟子です。木見先生のところで約6年近く生活しました。私にとって升田さんは良き先輩でもあるし、良き兄弟子だと、いまでもそう思っています。升田さんと富山で対局した時も早く進んで、この辺が“封じ手”にするのに手ごろじゃないだろうかということから、たしか3時半頃早い“封じ手”にしたことがあります。普通5時半まで行なうのに、2時間ぐらい早く終えて“封じ手”をした。残りの2時間をお互いに半分ずつ入れて、あずにしたらどうだろうか、というようなことにしました。

ところが、その日はファンを招待していたんですね。ファンが来て階下で待機していて、室内へ入れて観戦してもらおう予定になっていたんです。そんなことを知らずに2人が“封じ手”をしてやめてしまったんですね。もうやってないんだから、ファンを入れるわけにはいかない。そこで新聞社の関係者や観戦記者の方が、「いま、非常に難しい局面ですので、対局者が苦慮しております。入られると困りますから、下のほうで待っていてください」と言って(笑)、観戦記者が「次の一手はどう指すだろうか」という予想をしながら、時間をつないでくれたんです。私と升田さんの二人は、お客さんがすぐそばにいるんですから、部屋の外へ出るわけにはいかない。(笑)とうとう通常の“封じ手”の時間まで、将棋を指さずに部屋の中において、時間が経ってからやっと解放された、というようなこともありました。

新聞社の事情で対局時間も変化

対局につきましては、そんなようなあまり報道されないことがたくさんあります。二上達也さんとの将棋でした。伊豆の天城山で対局した時のことです。ちょうどいま頃の季節だったと

思います。集中豪雨がありまして、テレビを見ていると、その地域だけがたしか 500 ミリからの豪雨で、本当にバケツから水をひっくり返したくらい降っているんです。夜になったら、停電するということが事前に分かっております。夜までに終了させないと電気が消えて、将棋は指せない。ローソクではさせないという話が出まして、「それでは持ち時間はあるけれども、二上さん、夕方までに終了させようじゃないか」ということで、早く指した将棋もあります。過去にはあまり新聞に書けないようなことで、勝負がついていることもありました。

対局には持ち時間という制度があります。現在はタイトル戦（2日戦）ですと9時間です。一日の将棋ですと、3時間、4時間、5時間、6時間ぐらいと決めております。テレビの場合は別で、1時間ぐらいのうちに勝負をつけるような企画にはじめからなっています。担当者の方はご存じでしょうが、碁将棋は対局を行いますと、昔は午前1時、2時までというのがずいぶんありました。そうすると、主催している新聞社の多くの関係者が残業にもなるだろうし、またそれを報道していただく各地方紙の方たちも残業しなきゃいけないんで、無駄な経費がかかります。こんなようなこともありまして、待ち時間もだんだん、だんだん短くなって、できるだけ早く始めて早く終わるようになった。食事時間もなるべく短くしたほうがいいんじゃないだろうか、ということになり、今日のような持ち時間制度になっています。

ただ、私の経験から申し上げますと、やはり、若くて伸びる人は楽に仕事をしなきゃいけない、と思いますね。同じ仕事をするんでも、2時間でするものを5時間かけなきゃいけないし、5時間のものは7時間かけて慎重にその仕事をしていくことによって、思い出も残るし、また向上していくものです。若い人の場合はたくさん持ち時間で、その時間を有効に活用するような試合運びが必要だと思います。年齢をとってくると逆だと思いませんか。長年やってきたし、どうせ衰えが出ている年齢ならば、少しでも楽をしたいと。

今日は率直なお話をさせていただきました。人の立場によって物の見方や考え方も違いますが、私自身いままで50年間、将棋という道に携わらせていただいて、現役としてやってこられたことは本当によかったと、そんなこともしみじみ感じております。

質 疑 応 答

質問 羽生さんは天才中の天才みたいな人ですけれども、順位戦で2連敗しましたね。今期は昇級・昇段は無理じゃないか、とい見方が出ていましたが・・・。

大山 もう無理じゃないでしょうか。

質問 そうしますと、彼にとって最初の赤信号というか、スランプ状態というふうにもとれますが・・・。

大山 スランプというか、不調はあってもいいと思うし、当然だと思いますよね。それを何度か繰り返さなきゃいけないんです。一般論で言うと、弱い人のスランプはおかしいと思うんです。弱い人はあくまで弱いんでして、スランプじゃないんですよ。（笑）ある程度強い人が不調になるのが、スランプじゃなかるうかと思えます。

だけど、羽生さんにしては、いい試練でしょうね。いままで4段から5、6、7、8段と毎年上がったのは、加藤一二三さん。あとはだれですかね。中原さんも、たしか一度ぐらいは足踏みしたんじゃないかなかったですかね。

将棋界でも最近では女性が割合強くなりましたね。林葉直子、中井広恵、清水市代などが活躍しています。以前は蛸島彰子がおりました。俗に女流棋士という名前を使っておりますが、実際のことを申し上げますと、トップグループの男性の中に入りますと、奨励会で2級なんです。だから、男性とどっちが強いかなんて比較するのはまだ早いんでして、あくまでも女性は女性として強くなった、ということですね。

それからアマチュアの方も強くなりましたよ。私たちが若い頃には、アマチュアの全国名人でもプロの初段にはかなわないのが普通でした。近頃はそうじゃなくて、大体プロの4段と女性のトップとの中間ぐらいからちょっと上じゃないかと思います。今度、竜王戦にアマチュアからも参加することができるようになり、私の記憶に間違いがあるかもしれませんが、たしかアマチュアが一度勝っております。プロの中に入って、間違っても勝てるというのは、結構強いと思うんですね。

外人さんでは、私の知る限りでは、アメリカにカフマンさんという人がおりますが、この方は結構強い。あとは英国人で東京にいるタウンヒルさんぐらいでしょう。そのほかブラジル、それから、バンクーバーからシアトル、ハワイ、東南アジアといった地域で、大体日本のアマチュアの4段ぐらいの人が、一番強いんじゃないでしょうか。我流といっちゃおかしいけれども、強い人に恵まれる機会が少なく、独学で強くなれるのは、そのぐらいが限界じゃないだろうかと、各地を歩きまわして感じているわけなんです。

質問 NHKなんかでやっている早指しですね。やはり、早指しに強い人と、ああいうものを苦手とする人がいるんですかね。

大山 若干はあるかもしれませんが、どちらかという、いままでの傾向は強いほうが勝率が高かったですね。(笑)この2、3年顕著なんですけれども、私なんかは年齢がいつているほうだけど、中原誠さん、米長邦雄さん、加藤一二三さんにしても、そろそろ峠が近いか越したかというぐらいですから、若い者に負ける率が非常に高くなりました。この2、3年は若い者がずっと勝つようになりましたね。一つの時代の交代期が迫っているような感じがします。だけど、基本的には、やっぱり強い人はどうやっても強いですね。(笑)

私たちの場合、考えるとといいますか、時間を使って一手一手考えるかということ、そうでもな

いんですね。大体ひらめきが一番です。勘がにぶった時には、いくら考えてもいい知恵は出ないし、勘が良くなるとパツといい手が浮かんで、その中でどの手を指そうか、ということになる。それが一番理想的なんですね。

質問 将棋の技術とか、戦法とか、その戦法を展開していくスピードとか、そういうのものはずっと右肩上がりに変わってきているものなのでしょうかね。

大山 盤上があれだけのものですし、限られた駒ですし、将棋の駒はやはり飛車が中心ですよ。あとは角。それから大事な駒の動きになりますと、2枚の銀がありますね。あれが一番基本なんですよ。

そういう中では最近の傾向は、とくに中原さんがよくやりますが、飛車が歩の頭に出て、桂馬が飛んで、簡単に言えば素人のような指し方の将棋なんです。それがこのところ流行になっています。中原さんは実績を上げていますけれども、私たちから見ると、それはお手本にならないような指し方なんですね。昔で言えば、教科書にならないような指し方です。

勝つためには、ある程度必要かもしれませんけれども、やはり、普及する上では、これでいいんだというお手本が必要ですね。何でもいから勝てばいい、というだけでは、その社会は逆に言えば衰退するんじゃないでしょうか。人がついて行けないわけですよ。この形がいいんだ、ということを一般的に分かりやすくすれば、アマチュアの方が、やろうという気になりますよね。そういう面で、いまの指し方が将棋界にとってプラスかマイナスか分かりませんが、この2、3年ちょっと変わっているのは事実です。

質問 大山15世名人の場合、次の一手を打つのに一番長く考えられた時間は、何時間ぐらいですか。

大山 私の記憶ですと、たしか5段の時だったと思いますが、一手で3時間24分というのが

最高です。それも困ったから考えたんですよ。あの手、この手というので考えたんじゃないで、どうしても少し悪いから、「困ったなあ」というのが本音でした。

質問 考えに考えた揚げ句、二歩を打って失格した人とか、相手が打つ番であるにもかかわらず、また自分が打ってしまったとか、そういうミスが高段者の中にも、あるいは名人の中にもあると聞いたんですが、本当にそういったことがありますか。

大山 それはあります。将棋でも碁でもありますね。大体一年に2、3回はあるんじゃないでしょうか。その人たちに聞いてみますと、大概気の緩み、うっかりですね。王手に気づかずに王を取られたのが、戦後3人おりますよ。(笑) 4段と5段と8段です。普通考えられないですよ。それがあつたんです。将棋の場合は、王手をかけても、決して「王手」とは言わない。教えなくてもいいわけです。そんなような不注意とか、うっかりがありがちなものとして、それを少しでも少なくしようとするためにも、慎重さとか注意力が必要になるんじゃないでしょうか。

質問 将棋の観戦記に対して、書かれる立場から、ご注文があるのでしょうか。

大山 まあ、できるだけ正確なことを書いてほしいと思います(笑) 対局が終わりましたら観戦記者が解説者に聞く。あるいは対局者に、終わった時に感想を聞いて記事にする。しかし、本当のことを言って、次の時間に使わなきゃいけないような手がある時には、対局者は感想を言いやしないですよ。黙ってますよね。そんないい手を相手に教える必要はないわけですから。そんなこともあるので感想というのは、必ずしも正確とは言えないと思います。

負けた人が、「こうやれば良かったじゃないか」と言った時には、勝った人は「ああ、そうだな」と相槌を打つものなんです。本番で負

かしておきながら、「それが来りゃあ、またこれだ」と言って負かしちゃまずいですよね。(笑)しかし、それが報道されていくものだから、対局とその記事では若干ズレが生じることにもなるようです。

質問 囲碁に比べ、将棋はスポンサーをつくりにくいという側面があるのでは…？

大山 将棋の持つ性格的なものも一つあるんじゃないか、と思います。一般的に言って、幼稚園や小学校の頃に将棋を見て覚えた方が多いと思います。ところが中年以後になって、社会的に地位が上がって行って、ずっと続けるかという、将棋から碁に移る方が多いようです。なぜかという、一つには勝負が緩やかな感じが碁にあるためと、碁でしたら何目置こうが、最後は1目2目という数字で解決しますが、将棋の場合は、歩で桂馬を取られ、と金で角をいじめられ、そういったようないじめられる感じが盤上にあります。また、「負けました」と言わなきゃ終わらないんですね。碁でしたら、もう打つところがなくなったからダメを詰めようかということになり、計算してみたら「あ、負けたか」ということになりましたが、将棋は、自分から「負けた」と言わなきゃいけない。

そうした厳しさのために、社会的な地位の高い方の中には、将棋から碁へ移る方が多い。その点が、やはり、スポンサーということについてもマイナスになっているんじゃないか、と私は思っております。

質問 勝負の世界では、当然、心を平静に保つためいろいろなことをなさる方も多いと思うんです。先生の場合は、先ほどおっしゃったような常日頃から心をコントロールされていらっしゃるのでしょうか。

大山 まあ、そうですね。それとできるだけ正座を続けることですね。これがやはり、一番中心になると思います。あぐらをかいたり、姿勢が崩れ始めますと、内容も崩れがちになる。ま

た周囲から見て、負ける人は小さく見えるものですよ。勝つ人は大きく見えます。あぐらより正座のほうが大きく見えますから、正座しなきゃいけないでしょうね。それがずっと続けられる体力なり、根気なり、気力のある時は、内容が伴っているはずですよ。座ったから勝てるものじゃないけれども、そういう気持ちの持ち方ですね。

質問 対局の時に、一番注意される点は、どういことですか？

大山 これも年代によって考え方が変わってきます。若い頃は、自分の商売が順調にいくのが一番の健康法じゃないかと、こんなふうなことでやってきたつもりです。いまから6年前、昭和59年でしたか、下行結腸がんになりました。腸を手術いたしました。1か月もがんセンターに入院して、その後6年経っても再発した兆しが、いまのところないと思うと、良かったなと思います。けれども、やはり、一度そういった病気をしますと、少しは注意するようになります。自分の日頃の体調を知りながら、何かおかしいなと思えば、早く健康診断をするようになりました。

文責・編集部